

日米における高次脳機能障害の状況について

及川礼華

交通事故などによって脳に外傷を受けた「脳外傷」者の状況について、日本とアメリカの場合を比較しながら、障がい者の問題についても考察してみる。

まず、アメリカの方が脳外傷のリハビリ環境が整っている。また、障がい者の雇用や施設もアメリカの方が充実している。例えば、映画『アイ・アム・サム』(I am Sam, 2001年)の主人公サムは、知的障がいがある。しかし、アメリカではスターバックコーヒー店で雇用されており、障がい者でも働ける環境にあることが解る。また、病気をしてもすぐに専門の病院が見つかり、そこでリハビリをしながら自分自身を磨いていくことができる。しかし、日本にはそういう施設が未だ少ない。

脳外傷によって脳に障がいが生じた人は、自分の好きな事や興味のある事はできる。だが、普段何気なくしている作業、たとえば「今日は何をしていたか？」などと聞かれると答えに詰まる。脳外傷の結果、様々な症状が起こる。それらの後遺症の中でも、社会参加を拒む大きな要因に「高次脳機能障害」がある。直前のことも覚えていられない記憶障がい、集中力や意欲の障がい、周囲の状況に的確に対応できず誤りを修正できないなどの問題は、高次脳機能障害によると考えられる。脳外傷後に起きやすい衝動性や情緒不安定性、抑制が利かないこと、幼児的言動などは、人間関係の維持や社会への適応を拒む要因となる。高次脳機能障害になる原因としては、脳血管障がい、脳外傷、脳腫瘍などがあり、日本では94%を占めている。

後遺症の結果、社会参加が困難となった脳外傷者が、社会から孤立し生活への不安を高めるなど共通の悩みを抱えている。現在の障がい者福祉施策は、障がいを身体障がい、知的障がい、精神障がいという3つに分けて実施されている。しかし、脳外傷者の場合には、画一的な障がい分類による施策は適切ではなく、どの分野からの支援も受けられない人もいる。経済的な面での適切な障がい者認定基準や、福祉的な支援システム、それにリハビリテーション援助が確立されていないために、脳外傷者を取り巻く社会的な環境は、社会の理解を含めて心細い状況にある。

一般的に認知的・身体的に疲れやすいのも高次脳機能障害の特徴の一つである。また、気が散りやすく、注意力の維持が困難になる。例えば、以前は音楽を聴きながら勉強をできていた人でも、頭が混乱して集中できなくなってしまう。脳の左半球に損傷を受けた場合、読み書きといった言語に関する活動、また計算、記憶に困難が生じる。しかし、英語学習の場合は、逆に右脳を使うという。そして、脳は左右それぞれの部位が単一で動いているわけではない。どちらか一方が損傷しても、リハビリや時間の経過と共に、お互いの部位を補っていく。つまり、損傷を受けた部位を別の部位が補う。

私はアメリカの本を読んで気付いたことがある。日本では高次脳機能障害でも障害者手帳を取得できない人もいる。手帳がないと就職などの影響もある。しかしアメリカでは、高次脳機能障害者が高度な治療やリハビリを受けることができ、なかには就労できる人もいる。こうした違いがなくなる様な未来を私は願っている。

(指導教員 中村 敦志)